

第五章 銀の弾丸^{ブリット}

前方^{まえ}に行く千鶴や浩一の後^{あと}を追って、かりんは全力で走っていた。が、その頭の中は、ほとんどまっ白といってもよかった。

精神的緊張が極限まで達してしまったせいか、恐怖すら感じなくなっていたのだ。それでもかりんは、なかば無意識のうちに後方をふり返っていた。

背後に横井の影はなかった。門の内側に入ったところで、再び人狼の姿を取ろうとしている。少しは時間的な余裕^{よゆう}がある。と、みてとったかりんは、正面玄関へと通じる小階段^{のぼ}を上りきったところで、浩一にたずねた。

「浩ちゃん、どこへ行くつもりなの？」

浩一は、ちらっとかりんをふりむき、横井がすぐ後ろ^{うしろ}についてきてはいないことを確認すると、声を落として答えた。

「なんの考えもなしに闇雲^{やみくも}に逃げまわるつもりはない。まず、奴^{やつ}を撒^まいて時間をつくる」

時間をつくる？

時間をつくって、そのあと、どうするつもりなんだろう……。なにかいい考えでもあるっていつの、浩ちゃん？

もちろん、浩一に、かりんの心の中の問いかけが聞こえたはずはない。だが、かりんは期せずして、知りたかった答えをすぐに得^えることとなった。

「銀の武器を造^{つく}るための時間が必要なんだ」

浩一のこの言葉は、ほとんど呟^{つぶや}きに近かったが、たしかにそう聞き取れた。

やがて、靴入れの並んだエントランスホールを通り過ぎ、校舎中央の大階段が目前^{もくぜん}に迫^{せま}ってきた。

浩一が、正面の大階段を上^{のぼ}らずに、階下^{かいか}へと向^むかったことで、かりんは最終的な行き先^{せんせん}の、おおよその見当をつけることができた。それは千鶴もおなじだったらしく、先行^{せんこう}している浩一に向かって、確認のために声をかけた。

「地下の運動場ね。部室に行けば、銃の代^かわりになる弓という武器も手に入るし

……」

「でも、ちいちゃん。銃がまるで役に立たない相手に、弓矢が通じる？」
と、頭のベレーを手で押さえながら、かりんが早口でたずねる。

「うっ、かりんちゃん、するどい突っ込み。浩一、どうするの？ さっき、銀の武器がどうとかって聞こえたような気がしたけど」

階段を駆け下り、ちょうどエレベーターホールに着いたところで、浩一が答えた。

「地下には行かない……」

だが、そう言いながらも、左右に四機ずつ、計八機ある大型エレベーターの昇降ボタンに、次々と触れていく。それにつれ、待機中だったエレベーターのドアが順にゆっくりと開いていった。

千鶴もかりんも、理由がわからないといった表情で浩一を見ている。が、そんなふたりに構うことなく、浩一は自分のなすべき仕事をこなしている。

「なに、ぼーっとしてんだ？ 手伝えよ。全部地下へ降ろすんだ。ただし、無人のままだぞ。絶対にのるなよ！」

浩一は、エレベーターのボタンを操作しながら、小声かつ、早口にそう言った。かりんは、このときになってようやく、浩一が横井を撒くと言っていたことばの意味を理解した。どうやら、ほぼ同時に千鶴も気づいたらしい。ふたりはあわてて仕事に取りかかった。

しかし、約一名マイペースで行動しているものがいた。

相原である。彼女は、はあはあと肩で息をつきながらも、ベストのポケットから携帯を取りだし、一一〇をコールしていたのだ。

「け、圏外？ ああん、そんなあ……」

相原は携帯を手にしたまま、無意識のうちにくろくろしはじめた。そして、ふと今いる場所が地下だったことを思いだし、階段へと歩を進めていった。

「せ、先生っ、何やってんだよ!？」

相原の行動に気づいた浩一が、押し殺した声で問いたです。

「なにって、警察に連絡を……」

「間に合うわけないだろ。それに、奴を殺るとなると、後々面倒なことになる」

「で、でも……」

「いいから、早く!」

「あ……」

浩一たち四人は、ひとかたまりになり、大階段の下でじっと息をひそめていた。コツコツと、階段を下りてくる横井の靴音が、否応なしに四人の緊張を高めていく。

かなりきわどいタイミングだった。浩一がなかば無理やり相原を大階段の下に引きずり込んでから、おそらく、三十秒と経っていなかっただろう。

横井が妙にゆっくりと、自分たちの隠れている階段の真上を通りすぎていく。

そんな気がして、かりんは思わず浩一の胸に顔をうずめ、ぎゅっと目をつぶった。

浩ちゃん！

かりんが、心のなかで浩一の名前を呼んだそのとき。横井の靴音がぴたっと止まった。

まだ完全に、階段を下りきってはいない。

衣擦れの音ひとつ、たてることの許されない状況が、十秒、二十秒とつづいていく。

「なかなか面白い趣向だ。だが、狩りとはこうでなくてはな。くっくくくくく」

……。せいぜい楽しませてもらおうか」

くぐもった横井の独り言が、あたりに響く。

かりんはこのとき、初めて、冷や汗というものがどんなものなのか、ということを知ることになった。ほんとうに、脇の下を冷たい何か流れ落ちていくのを、感じる事ができるのだ。

すぐ隣にいる、千鶴の躰の震えが、押しつけられた制服の上から伝わってくる。かりんは気になってそっと目をあげ、千鶴の様子をうかがった。見ると、千鶴は、自分で自分の口を両手で押さえ、涙の浮かんだ瞳を、大きく見ひらくようにしている。泣きだしたいのを必死になって堪えているのだろう。かりん自身も、気持ちはおなじだった。

再び、横井の靴音が聞こえはじめた。

しかし。

どついついこと？

かりんが、不可解な思いにとらわれたのも、無理はなかった。何故なら、横井は階段を下りず、逆に上っていったからだ。とりあえず、気づかれた様子はないので、ひとまずは安心といったところだが。

階段のあたりから、横井の気配が消えて一分ほど過ぎただろうか。かりんは、マネキンのように身動きひとつせず、じっと息をひそめていることに、とうとう耐えきれなくなり、浩一の胸をつついて、喋ってもいいかどうか訊いてみた。

「なんだ？」

浩一は、ささやくような声で答えた。かりんも囁き声で応じる。

「ねえ、あいつはどこに行ったの？ 地下には降りていかなかったみたいだけど……。もしかして、わたしたちの意図に気づいたんじゃない？」

浩一がかりんの問いに答えようと口をひらきかけたとき、横から相原が割って入った。

「ううん、それはないと思う。横井先生は紺野さんの仕掛けた心理トリックに、完全に引っかけたわ。このあたりを捜しまわらなかったのがその証拠よ。エレベーターで地下に降りていかなかったのは、美香たちの裏をかこうとしてのことだと思う」

「裏をかく？」

「ええ、横井先生は、池の向こう側にある、非常用のエレベーターを使って地下に降りるつもりなのよ」

「あ！」

かりんは、胸の前で手を合わせた。

「ばあーか、なに感心してんだよ。裏の裏をかいたのは、おれのほうだぜ」
得意そうに浩一が言う。

「う、うん。わかってるわよ、そんなこと……。あ、そうだ。それより、さつきから気になってることがひとつあるんだけど、訊いてもいい？」

「ああ」

「うーんとね、あいつはなんで、わたしたちが隠れているこのあたりまで、迷わずに来れたのかなって……」

「なんだ、そんなことか。なにしろ、奴は人狼だからな、犬なみとまではいかなくても、かなり鼻が利くんじゃないか」

「えっ？ じゃあどうして、ここに隠れているのがわからなかったの？」
 「それは……」

浩一が一瞬、返答につまったとき、横から相原が助け船をだしてくれた。

「それはたぶん、人間としての部分で惑わされちゃったってことね。本能のままに行動していれば、美香たちの居場所くらい、すぐに突きとめられたはずよ。でも、横井先生はエレベーターが何かっていうことを知っていたし、それがどこに通じているかっていうことも知っていた。だから……」

「あの、お話の途中で申し訳ないんですけど……」

と、やや遠慮がちに千鶴が割って入った。

「え、ああ、紺野さん。よかった、すこしは落ちついたみたいね。なにか気になることでも？」

「こんなところで、悠長にお話ししてもいいのかなって、思ったものだから……」

千鶴の言葉には、ほんの少しだけシニカルな響きがあった。

「そうだな、せつかく稼いだ時間を無駄にはできない。そろそろ行動に移るか……」

「で、どうするの紺野くん」

三人の女性たちの代表として、相原がたずねた。

「おれは、あの銃を取ってくるから、先生たちはさきに化学室に行ってくれ」

「化学室？」

「そう。銀の弾丸をつくれるのは化学室だけなんだ。だから……」

「銀の……ブリット？」

「うん。化学室には、銀とかガスバーナーとか、銀の弾丸をつくるのにどうしても必要な物が、おあつらえ向きにすべてそろってるんだ」

「ブリットって銃弾のことね。でも、化学室に純銀なんて、あつたっけ？」

と、今度は千鶴が質問してきた。

「あるさ。酸化銀の粉末とかたちでだけど。あれは、ほんのちょっと熱してやるだけで、純度の高い銀粉が得られるんだ。そして、さらに加熱して溶かして固めれば、あつというまに、純銀弾のできあがりってわけ」

「浩ちゃん、すごい！ でも、どうしてそんなこと知ってるの？」

かりんが目をまるくして訊く。

「どうしてって……」

浩一は、ちらつと相原に視線をやり、言葉が続けた。

「かりんにやったメイプルリーフあっただろ？ あれで型を取って、純銀のオリジナル硬貨を造ってやるうって、前々から思ってたんだ。その話をチラツと化学部のやつに話したら、それなら化学室の鍵つきの戸棚に、いいものがあるってことになってさ……」

「……………」

「それって、偽造っていわない？」

と、黙り込んでしまったかりんにかわって、千鶴がさりげなく非難する。そして、相原がそのあとを継ぎ、追いつちをかけた。

「それに、学校の備品をかってに……それも私利私欲を満たすために使うなんて、はつきり言って犯罪よ、紺野くん！」

「うっ……………」

浩一は、途中で話を打ち切り、逃げるようにして、大階段の下から這い出した。

化学室へとつづく廊下を、かりん、千鶴、相原の三人は、窓の外から姿を見られないようにやや背をかがめ、小走りに駆けていた。

B棟三階の東端の部屋が、化学室に割り当てられている。

三人は今、その部屋の前で立ち止まり、顔を見合わせてうなずきあったところだ。

千鶴が、そつとドアのノブに手を掛ける。

「……………もしかして、カギが掛かってるんじゃない？」

千鶴の耳もとで、かりんがささやいた。

ふだん学校が休みのときは、化学室に限らず、特殊教室はすべて厳重に施錠されているはずだった。そのときは、いったん職員室までもどって、鍵を取ってこなくてはならない。

だが、予想に反して、ノブは最後までまわりきった。

カチャツという微かな音をたて、ドアが開く。

「え？」

空を切り裂く、ヒュツという音とともに、いきなり、金属バットが千鶴の視界
 いっぱいに飛び込んできた。

が、間一髪のところ、千鶴は身をかわすことに成功する。

バットを力いっぱい振り下ろしてきたその男は、目標を失ったことにより勢い
 あまって体勢を崩し、顔から相原の胸へと突っ込んでいった。

「ムゲツ!」

「キヤーツ」

と、声にならない悲鳴を上げる相原。

膝蹴りが男の股間を直撃し、つづけざまに、肘打ちが顔面に炸裂した。

「ぶぶつ……」

男は悶絶したまま相原にしがみつくようにして、ズルズルとくずおれていった。

す、すつごーい。

相原先生って強いんだ。拳法か何かやってるのかな?

かりんは、かばんを抱きしめたまま、素直に感心している。が、あまりにも突
 然のことだったので、目の前に倒れている男が、いったい何者なのか という
 ことにまでは、まだ、頭がまわっていないようだ。

一方、胸を押さえてどきどきしていた千鶴は、困惑した様子ながらも、あわて
 て伸びた男の手からバットをもぎ取った。

と、そのとき。

「か、川島あーっ!」

「川島くーんっ!」

倒れた男の名前らしきものを呼びながら、新たにふたりの人間が化学室から飛
 びだしてきた。

見ると、倒れている男をふくめ、化学室にいた三人は、いずれも制服の上に、
 白衣をはおっている。当然のことながら、この学校に在籍している生徒、という
 ことになるだろう。

そして、そのうちのひとり、三つ編みのお下げ髪に銀縁の丸眼鏡が妙に似合
 う、やや華奢な体つきの美少女だった。

千鶴は、倒れている男子生徒ではなく、目の前に立っている男女ふたりに向
 かって、怒りをぶちまけた。

「あんたたち、いったいどういうつもりなの、こんなもの振りまわしたりして、危ないじゃないっ！」

「あつ、あの、ごめんなさい……」

眼鏡をかけた少女は、かりんたち三人の中に相原の姿をみとめ、とまどいながらも頭を下げて謝った。

「でも、さつき銃声が聞こえたものだから……。てっきりテロリストとか、その手の類の犯罪者が、この学校に侵入してきたんじゃないかって、思いこんでしまったんです。どうかゆるしてください」

「テロリスト、ね。もつとたちの悪いものよ横井は……」

千鶴は、白衣の間にのぞいているリボンの色から、目の前の少女が自分より後輩の一年生だと判断し、いくぶん声の調子をやわらげて先をつづけた。

「……それにしても、よくわかったわね、銃声だつて」

「は、はい。爆竹や、クラッカーの類なら、炸裂音が、あのような間隔で鳴ったりしませんから……」

「……………」

「あの、もしかして違いました？」

「いいえ、あなたの推理したとおりよ」

眉をひくつかせながら、千鶴が言う。

「なんかやりにくい娘ね……」。

千鶴の顔にはありありとそんな表情が浮かんでいたのだが、少女は千鶴の返した言葉のほうに気を取られ、そのことには気づかなかつたようだ。不安そうに顔をくもらせて、うつむいた。

「あの、それで……」

おそらく少女は、銃声の原因が何なのかをたずねるつもりだったのだろう。が、言葉途中ではっと顔を上げ、倒れている男子生徒のほうに注意を戻し、駆け寄っていた。

「川島くん、しつかり……」

「大丈夫。気を失ってるだけだから」

それまで、事故で気絶させてしまった生徒を介抱していた相原だったが、顔を上げ、丸眼鏡の少女に向かって、にこっと微笑んだ。

少女は、ほっとした様子でもう一人の男子生徒をふり返り、言った。

「先輩、川島くん、大丈夫みたい……」

呆然と突っ立っていたその男子生徒は、我にかえったように目をしばたたき、うなずいた。

相原は、目の前の少女に向かって、ややためらいがちに訊いた。

「あなた、南方さん……よね？ 美香のクラスの……」

「はい。こんにちは、先生……」

「なんか、いつもと雰囲気ちがうから、ちょっとびっくりしちゃった」

「もしかして、ふだんはかけていないメガネをかけているせい……ですか？」

「そうね、そのうえ白衣を着てるから、まるで、どこかの研究機関の科学者って感じ」

「あは、何かすごくうれしいです」

そう言いつつ、南方は丸眼鏡をとって立ち上がった。そして、かりんに向かって微笑みかけ、会釈した。

「こんにちは、琴宮さん」

「あ、こんにちは……」

かりんは、あわてて挨拶を返した。

今かりんたちが置かれている状況など、まったく理解していない南方は、のんびりとした口調で説明しはじめた。

「これ、実は伊達メガネなんです。ほら、マッドなサイエンティストには、この手の丸眼鏡が定番でしょう。わたくし、らしく見えますかしら？」

南方は丸眼鏡をかけなおし、かりんたち三人の顔を、順番にのぞき込むような感じで見ていった。

かりんは、今までの緊張が、いっきに足もとに流れ落ちていくような、奇妙な感覚を味わいながら、心ひそかに思った。

み、南方さんって、こういう性格の娘だったの？

「そう、化学部の部活で……」

「はい、ちゃんと顧問の先生の許可も取っております」

南方は、

『祝日で学校が休みなのに、こんなところでいったい何をしていたの?』
 という千鶴の問いに対して、緊張ぎみにそう答えた。

「ちなみに、先生に伸のされてしまった子が、隣のクラスの川島くん、こちらの、
 一見、丸刈りスポーツ少年ふうのヒトが、私たち化学部の部長で、二年生の日向ひゅうが
 さんです」

「ど、どうも……」

南方に紹介された日向は、照れたように顔を赤らめ、五分刈りの頭に手をやっ
 た。

「あれ、あなた化学部だったの? たしか、野球部のユニフォームを着て、グラ
 ウンドを走っているのを見たような記憶があるんだけど……」

千鶴に、そう問いかけられた日向は、あいかわらず頭に手をやったまま言った。
 「実は、野球部のほうと掛け持ちなんだ」

「ふーん、そう……。あ、あたしは紺野。紺野千鶴。クラスはちがうけど、学年
 はいっしょみたいだし、とりあえず、よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

おなじポーズのまま、日向が頭を下げた。

いまだに気を失ったままの川島をのぞき、ひととおり、自己紹介らしきものが
 終わったところで、かりんは、少々切迫せつぱくぎみに話を切りだした。

「南方さん、できたら手伝ってほしいんだけど……」

「はい。あ、えーと……。手伝うって、何をでしょう?」

「う、うん、銀の弾丸たまづくり……」

「はい?」

かりんは、上着のポケットから予備の弾丸だんがんを取りだし、南方に手渡した。

「鉛でできた先っぽの部分だけを、銀でつくったものと交換すればいいだけだか
 ら、それほどむずかしくはないと思うんだけど……。どうかな?」

南方は、つかのま自身の手の中のものに目を落としていたが、かりんの言葉に
 ふと顔を上げ、たずねた。

「あの、あの、じゃあ、テロリストよりたちが悪い相手って……。もしかして、
 狼男なにか何かですか?」

「え? なんでわかったの!?!」

「え、ええーっ!? ほ、ほんとうに、ほんとのほんとに、狼男なんですか?」
「……………」

かりんの沈黙に不安を覚えた南方は、否定のことばを期待して、千鶴に視線を移し、ついで、助けをもとめるかのように、相原の顔をのぞき込んだ。しかし、ふたりとも南方から視線をそらしたまま、かりんと同様、沈黙をまもっている。事ここに至って、ようやく現実を受け入れた南方は、いまにも泣きだしそうな声でつぶやいた。

「じよ、じょうだんのつもりだったのに……。ひどいですう」

浩一は、校門前にいた。

コルトは探すまでもなく、すぐに見つけたので、拾いあげ、ほこりを払った。踵を返し、校舎に向かって歩きだす。

いけね、薬莢ひろってかなきゃ……………。

上着の内ポケットにコルトをしまい込み、浩一がそう思って立ち止まったそのとき。

「なっ……………」

目の前に、人狼横井が立っていた。

いくらなんでも早すぎる。

そうは思ったが、現に横井が目の前にいる以上どうなるものでもない。

「意外に気づくのが早かったな」

「……………」

横井は無言のまま、ことばを返そうとはせず、浩一を睨めつけている。

横井との相対距離はおよそ、四メートル。だが、人狼である横井にとっては、一瞬で距離を詰められる、いわゆる間合いのうちにあつたにちがいない。

逃げだすタイミングをはかっていた浩一の心を見透かすかのように、横井は口を開いた。

「おまえ一人、こんな処で何をしている」

「そういうあんたこそ」

「最近の若い奴らは、目上の人間に対する礼儀をしらん。質問に対し、質問で答えらるなど……………」

横井の軀が、一瞬、沈み込む。

「ちっ」

舌打ちしつつ浩一は真後ろに跳ぶ。

「十年早い！」

横井が地を蹴り、跳躍する。

浩一は、風圧をともなった横井の拳を顎先ぎりぎりでかわした。が、着地の瞬間、足を刈られ横様に倒れてしまう。

そこに間髪を容れず、横井の全体重を乗せた肘打ちが迫る。

正確に顔面をねらった肘打ちを、軀を捻ってなんとかやり過ごしたものの、そこまでだった。

体勢をたて直そうと、立ち上がりかけたところに、重い掌底の一撃を鳩尾にくらってしまったのだ。

「ぐはっ！」

呼吸が止まり、軀を折ってその場に膝をつく。

口から血の混じった胃液を吐きだし、のたうちまわって苦しんでいる浩一を見下ろすように、横井はしばし、超然として佇んでいた。が、やおら浩一の襟もとを掴み、膂力にものを言わせ、吊り上げるようにして持ち上げた。

浩一の足が地面から離れ、宙に浮く。

「あ……………」

必死の抵抗を試みる浩一。

だが、その腕がだらりと垂れ下がり、ぴくりとも動かなくなるまで、それほど時を必要としなかった。